

ハイム・ナフマン・ビアリクにおけるヘブライ語と イディッシュ語

飛鳥井雅友

ハイム・ナフマン・ビアリク（1873 - 1934）といえば、イスラエルにおいては「国民的詩人」と呼ばれ、現代ヘブライ語文学における最大の詩人として知らぬ者のない存在と言ってよいであろう。彼の名声は基本的に、ヘブライ語による詩作と、その詩作を通して国家言語としてのヘブライ語の復活に果たした貢献によるが、ビアリクとイディッシュ語とのかかわりもビアリク研究におけるひとつのテーマとなっているようである。ビアリクのイディッシュ語による詩作の問題、ビアリクの母語としてのイディッシュ語の問題、そしてビアリクのヘブライ語詩に対するイディッシュ語文学の影響など、扱われる範囲は多岐にわたるが、ここでは、ビアリクに関する若干の紹介の後、「虐殺の町で」を中心とする彼のイディッシュ語作品とその影響についてとりあげ、最後に晩年のビアリクをめぐるエピソードに触れたい。

1.

ビアリクの生まれはロシアのヴォロニア地方の小村（現ウクライナ）であり、母語は、この地方の多くのユダヤ人がそうであったように、イディッシュ語である。しかし、彼がのちに創作の言語として選んだのは、基本的にはヘブライ語であった。彼は3通りの仕方でヘブライ語に触れている。ひとつは、トラーの学習である。彼は父親の死後、祖父に預けられて成長するのであるが、この祖父が熱心なハシード（敬虔派）であり、ビアリクはこの祖父のもとで聖書のヘブライ語のほか、ミシュナのヘブライ語に深く接した。彼はまた中世スペインのヘブライ語詩人の作品も熱心に読んだ。さらに——これは祖父の望むところではなかったが——ビアリクはハスカラー（啓蒙主義）の文献も読むようになり、聖書やラビの言葉としてではない、現代のヘブライ語の作品や評論にも接することになる。

そうした評論の中で、とりわけ若きビアリクが心酔したのが、アハド・ハ・アム（1856 - 1927）の著作であった。アハド・ハ・アムが思想家として脚光を浴びたのは、ちょうどビアリクの青年時代、1889年以降で、テオドール・ヘルツルらの政治的シオニズムとは距離をおいて精神的・倫理的な面でユダヤ・ナショナリズムを鼓舞しつつ、言語については——アハド・ハ・アム自身、ウクライナに生まれてイディッシュ語を母語としながら——“ヘブライ語こそユダヤ人の民族言語であったし、これからもそうである”と主張して、イディッシュ語に対しては否定的な態度をとっていた。

ビアリクの詩人としての活動も、1891年、18才のときにオデッサを訪れたのが始まりである。アハド・ハ・アムはビアリクの詩を読み、彼をオデッサでヘブライ語出版に携わっていたラヴィニツキ（1859-1944）に紹介。以後、ビアリクはオデッサのラヴィニツキの雑誌を中心に詩を発

表していくことになる。ビアリク自身、1900年には本格的にオデッサに転居し、アハド・ハ・アムのサークルの一員として、ヘブライ語の著作・出版・教育を中心に、オデッサのユダヤ人コミュニティのために働きながら生活していくことになる。

ビアリクの初期の作品は、離散の民の苦難を耐え忍び、シオンへのあこがれを歌うのが基本である。しかしオデッサ移住とほぼ時を同じくして個人の心情を歌う歌や明るい作品もあらわれ、そこから約10年間のオデッサ時代がもっとも充実した時期であるとされる。ロシア革命の混乱からオデッサを離れ、その後イスラエルに移住する晩年は、社会的活動に力を入れており、詩人としては「沈黙」という語も用いられるが、それでも民謡調の作品や童謡などを書いている。その他、自伝的短編小説など。作品の大部分はヘブライ語である。

しかしビアリクはヘブライ語のみならず、イディッシュ語でもいくつか詩を書いている。イディッシュ語で詩を書きはじめたきっかけは、必ずしも内面的なものではなく、ラヴィニツキの勧めによるものであった。ラヴィニツキは、アハド・ハ・アムのもとでヘブライ語出版にかかわっていたわけであるが、ラヴィニツキ自身は決してイディッシュ語に対して否定的ではなく、イディッシュ語の文芸雑誌の創刊も計画し、1899年、すでにヘブライ語詩の創作で数年のキャリアをつんでいたビアリクにも参加を求めたのである。そのときビアリクは乗り気ではなく、本格的に取り組むつもりはない意思を表明して、ジャルゴンはいずれ減びるであろうと（アハド・ハ・アムにならって）ラヴィニツキに手紙で答えている。ただ同時に、その時の手紙で彼はこんな風にも書いている。

幼年時代の思い出へのあこがれや、ゲッターとヘデルの少年時代は、聖なる言語で語るよりも、まさにそれを経験していた同じ言語であるジャルゴンで語る方がうまくいきます。幾度かわたしは、それらを聖なる言語で語ってみようとしたのですが、首尾よくいきませんでした。ジャルゴンでなら、わたしはそれらを味わい尽くしていると感じるのです。

そして実際、彼はイディッシュ語の作品を残している。数としては、大小合わせて生涯でおよそ10数編。イディッシュ語によるオリジナル作品として書かれたものもあれば、ヘブライ語作品のイディッシュ語版として作られたものもあり、あるいは中世スペインのヘブライ語詩人ユダ・ハレヴィの作品のイディッシュ語訳などもある。扱われているテーマとしては、やはり民の苦難（「私は泣きたい [Glust zikh mir veynen]」「最後の言葉 [Dos letste vort]」など）があり、さらには失われた幼年時代へのあこがれ（「緑の小さな木の下で [Unter di grininke beyemelekh]」「高い山の上で [Af dem hoykhn barg]」など）もある。後者は、ラヴィニツキへの返信に呼応するものであろう。

しかしビアリクにとって、イディッシュ語で作品を発表するということは、単にラヴィニツキの勧めというだけでは決してなく、あるいは自らの幼年時代に関わるものだけでもなかった。このことを最もよくあらわしているのが、やはりなんとといっても、「虐殺の町で」のイディッシュ語版（[In shkhite shtot]）の制作である。

2.

詩「虐殺の町で」は、まずヘブライ語で（〔Be-ir ha-harega〕）書かれた作品である。ピアリク自身にとってもこれは特別な作品であり、その制作にいたる経緯や発表にいたる経緯を見ても、彼のこれまでの作品とは違って、広い世界とのつながりをもっていた。イディッシュ語版の制作も、それと決して無関係ではない。

作品のきっかけとなったのは、1903年のキシネフのボグロムである。この年の4月、オデッサからあまり遠くないキシネフの町のユダヤ人コミュニティが組織的な襲撃を受けた。虐殺、強姦、破壊、略奪が行われ、死傷者は数百名に及んだ。このボグロムは、ロシア領内で問題となったばかりでなく、西ヨーロッパやアメリカのマスコミでも大きく取り上げられた。

このボグロムとのピアリクの関わりは、まずはやはりオデッサのアハド・ハ・アムのサークルの一員としてのものである。ボグロムの第一報が伝えられたオデッサでは、即座にアハド・ハ・アムが中心となって声明文が発表された。この声明文は、ユダヤ人同胞に対し、忍従するのではなく自衛のために行動することを呼びかけるもので、「迫害者に憐れみを乞うな」など、力強い文言を連ねたものであった。署名者5人のうち、最初の1人がアハド・ハ・アム、最後から2人目がラヴィニツキ、そして最後の1人がピアリクである。その後、オデッサのアメリカ領事館で情勢把握のための会合が開かれた際にも、ピアリクはアハド・ハ・アムらとともに出席している。結局、ピアリクは、オデッサのユダヤ人コミュニティにより、ボグロム体験者からの聞き取り調査のためにキシネフに派遣されることになり、ボグロムの3カ月後、1903年の7月に現地に入った。彼は調査報告書をオデッサに持ち帰るが、彼が書いていたのは報告書だけではなかったのである。

このボグロムは、ピアリクを突き動かして詩を書かせた。ただし、彼はこの当時、必ずしも民族に対する迫害だけを詩作のテーマとしていたわけではなく、むしろその主題から離れた作品に新境地を見だしていたはずであった。キシネフのボグロムは、彼をふたたびかつてのテーマに引き戻したのである。現地に入る前にすでに2篇、オデッサで「虐殺について」と「日の出」という、怒りや慰めを歌う短いヘブライ語詩を書いていたが、キシネフ入りした後に書いた「虐殺の町で」は、それらとは異なり全272行に及ぶ長大な作品となった。この詩はボグロムの状況を報告しながら、それだけではない。しかし苦難を嘆いたり耐え忍んだりするものではなく、慰めの言葉をかけるものですらない。むしろ逆に、無抵抗に襲撃されて忍従に甘んじる同胞に「永遠の乞食め！」と罵倒を浴びせる激烈な内容をもつものであった。

この詩がピアリク自身にとって特別な作品であったことは間違いなく、彼はこれをこれまでのようにラヴィニツキの雑誌から発表しようとはしていない。原稿をオデッサではなくサンクトペテルブルクに送り、そこのヘブライ語雑誌からの発表を模索した。ようやく発表にこぎつけたのは1904年7月になってからであったが、ひとたび発表されると、「いかなる言語においても、たった一篇の詩がこれほどまでに民のすべてに衝撃を与えることはない」と評されるほど、衝撃をもって受け止められたのである。

しかし衝撃がこれほどまでに大きく広がったのは、ヘブライ語作品そのものによるのではなく、ヘブライ語版以外のバージョンが出回ったことが大きな要因である。そのひとつがロシア

語訳であり、もうひとつがピアリク自身によって制作されたイディッシュ語版であった。

ロシア語訳の制作者は、行動的シオニスト、ウラディーミル・ジャボチンスキーである。ジャボチンスキーはこの詩が発表されるとすぐにロシア語訳を制作、それだけではなく、各地で集会を開いてロシア語を話すユダヤ人の前でこの詩を朗読し、ユダヤ人の自衛組織の結成を呼びかけた。

一方イディッシュ語訳の必要性も、詩の発表直後から考えられていたらしい。すでにヘブライ語ジャーナリズムが成立していたとはいえ、アハド・ハ・アムらの主張にもかかわらず口語としてのヘブライ語は当時、未完成であり、ロシア東欧地域の多くのユダヤ人にとって基本の言語はあくまでもイディッシュ語であった。他者による翻訳も試みられたようであるが（たとえばイツホク・レイブシュ・ペレッツ）、ピアリクはその出来栄にたいそう不満であったという。結局、ピアリクは、自らイディッシュ語版の制作に乗り出し、1906年に発表したのである。

このとき、彼はヘブライ語をイディッシュ語に単に翻訳したのではなく、ヘブライ語版とはパラレルでありながらも、新しい要素を取り込んだ、あらたなイディッシュ語版を制作している。以下に、例として冒頭部のみを挙げよう。

ヘブライ語版：

立て、さあ行くがいい、虐殺の町へ。おまえは庭にやって来て、
おまえの目で見、おまえの手で触れる。柵の上、
木の上、石の上、壁の漆喰の表面で、
乾いた血、こびりついた脳髄に。それは死者たちのものだ。
そこからおまえは廢墟へ行き、破れを過ぎ、
穴のあいた壁を、壊れたかまどを通り過ぎる。
そこでは槌が深く裂き、穴を大きく広げ、
黒い石がむき出しで、やけたレンガがさらけだされ、
死に至る黒い傷の開いた穴のようだ。
それらはもはや救われることはなく、癒されることはない。
[・・・・・・・・]

イディッシュ語版：

……鋼と鉄で、冷たく固く口を閉ざして、
自らの心を鍛えよ、おまえ、人間よ——そして来い、
来い、行くがいい、虐殺の町へ、おまえの目で見ることがいい、
おまえ自身の手で触れるがいい。
柵と柱と門と壁の上、
通りの石とあらゆる木の上で、
黒くこびりついた血と脳髄に。
それはおまえの兄弟たちの頭と首のものだ。
そしておまえは廢墟のあいだをさまようがいい。

ねじ曲げられた扉のついた破れた壁を通り、
ぶち壊されたかまど、へし折られた煙突、
むき出しの黒い石、半ば焼け焦げたレンガを過ぎて。
そこでは炎と斧と鉄とが昨日、
血の婚礼で野蛮な踊りを踊ったのだ。
そして這っていけ、屋根裏を、穴だらけの屋根を、
そしてあらゆる黒い穴をのぞき込め。
それは開いた、黒い、黙した傷。
この世の救いを待ってはいない。
[・・・・・・・・]

ヘブライ語版の冒頭 10 行が、イディッシュ語版の冒頭 18 行と対応する。後者の方が長くなるのは、ひとつには、ヘブライ語がきわめて簡潔であるのに対してイディッシュ語は冗長であるという、両言語の基本的な性格の違いにもよるのであるが、それだけではない。

ヘブライ語版の 1 行目に対応するのはイディッシュ語版では 3 行目である。イディッシュ語版ではその前に 2 行を加えている。そこに見られる「心を鍛えよ」という表現は、ピアリクのヘブライ語作品「冬の歌 [Mi-shire ha-choreph]」に登場するモチーフである。ヘブライ語版「虐殺の町で」の次にピアリクが書いた作品が「冬の歌」であり、そこで使った表現を、ピアリクは「虐殺の町で」イディッシュ語版につき込んでいるのである。このイディッシュ語版が独自の作品として構想されていることは、この最初の数行からだけでも明らかであろう。結果として、イディッシュ語版は大きく膨れ上がり、全体でおよそ 350 行になっている。

すでにヘブライ語版を書いておきながら、彼がこれだけ力を入れてイディッシュ語版を制作したひとつの目的は、イディッシュ語を母語として現代ヘブライ語を読まないユダヤの大衆に訴えることではあることは間違いないとしても、さて、両言語版を比較してみると、イディッシュ語版は必ずしもユダヤ人大衆のために書かれているのではないことも分かる。たとえば冒頭部、イディッシュ語版には、ヘブライ語版には見られない「血の婚礼」という表現が加えられている。さまざまな芸術作品に繰り返し取り上げられるこのモチーフが向けられているのは、イディッシュ語しか知らないユダヤ人の大衆であろうか？ ある研究によれば、ピアリクにおいては、ヘブライ語作品におけるよりもイディッシュ語作品における方が、ヨーロッパの文学作品やそこに見られるモチーフとの関連が強く見られ、あるいはまた新約聖書のモチーフやキリスト論の取り込みも見られるという。この見解に従うならば、ピアリクが想定していた読者は、イディッシュ語しか知らない大衆というよりはむしろ、イディッシュ語以外の他の言語も知り、ヨーロッパのさまざまな文化に触れ、伝統やシオニズムには必ずしも依存せず、それ故に自らの言語としてヘブライ語を選択しない、あるいはそれを拒否する読者である。イディッシュ語版を制作した時のピアリクにとって、イディッシュ語で作品を書くということは、そうした読者や、あるいは彼らの生きる世界に通ずることであつたにちがいない。

言葉の基本的な組立て方も、ヘブライ語版とイディッシュ語版ではそもそも大きく異なる。口語ヘブライ語未完成の当時であつて、ピアリクのヘブライ語詩の詩語は旧約聖書ヘブライ語

のコーラージュでできている。たとえばヘブライ語版冒頭の「立て、さあ行くがいい、虐殺の町へ」の場合、「立て、さあ」はヨナ書1章2節、「さあ行くがいい」は創世記12章1節そのままであり、「虐殺の町へ」はヨナ書1章2節「大なる町へ」の「大なる」をエレミヤ書7章32節「虐殺の谷」の「虐殺の」とりかえたものにほかならない。これに対してイディッシュ語版では、元のヘブライ語の意味や音をさまざまな形で取り込みつつも（実は、ヘブライ語の1行目冒頭の「立て〔qum〕」とイディッシュ語3行目冒頭の「来い」は音も綴りも同一である）、ビアリクは自由に言葉を使っている。ヘブライ語での詩作を中心としていたビアリクにとって、イディッシュ語での詩作は、ヘブライ語聖書の強固な伝統からの解放でもあったのである。

「虐殺の町で」は、その後英訳も作られ、西欧やアメリカにも広まっていった。元来のヘブライ語版の英訳は1914年まで待たなければならなかったが、イディッシュ語版からの英訳は、すでに1906年のうちに公表されている。いずれにせよ、ビアリクはこの作品により、それまでのオデッサのアハド・ハ・アム傘下の詩人という立場からぬけだして、ユダヤ人にとっては「国民的詩人」となり、欧米世界においても広く知られる存在となっていった。ビアリク自身はその後も基本的にヘブライ語での詩作を続けており、イディッシュ語での創作にこれ以上の力を入れることはなかったが、彼がその地位を獲得するにあって、イディッシュ語の果たした役割は大きかったのである。

3.

しかし、ビアリク個人にとってのイディッシュ語は、何よりもまず、幼少期以来の母語であった。彼はさまざまな時代のヘブライ語を学んでヘブライ語で詩を書き、ロシア語を学び、英語も習得していたが、日常会話の言語は常にイディッシュ語であった。このことは、彼にとってはまったく自明のことであったのだが、彼がヘブライ語復興の歴史において期待された役割とは必ずしも調和するものではなかった。これについて最後に少し触れておく。

ビアリクは、ロシア革命による混乱を受けてオデッサを離れた後、最終的には（1924年）イスラエルの地に移住し、ヘブライ作家協会の会長職についたほか、ヘブライ大学設立にあたっては理事に就任するなど要職を務めた。こうした活動を通して、イスラエルの地におけるヘブライ語の復興に貢献することをビアリク自身が望んだことは疑いない。ヘブライ語での詩作がそもそも、民族言語としてのヘブライ語というアハド・ハ・アムの主張に呼応したものであったし、ビアリクが特に晩年、ヘブライ語の民謡調の作品や童謡の創作に力を入れたのも、民衆の匿名の文化的貢献は特定の個人のそれにまさるというアハド・ハ・アムの基本的理念をヘブライ語において実現しようとする意図をもってのことである（ただし言い換えればこれは「民衆のひとり」を自認しながらイディッシュ語の意義を認めないアハド・ハ・アムの理念の言語面での難点を修復する試みであったとも言えるが）。ところが、そのビアリクが、イスラエルの地においても依然として、日常においてはイディッシュ語を話し続けたのである。イスラエルの地におけるヘブライ語の復活を期待する人々の目に、これは不可解、あるいはむしろ言語道断と映った。

ビアリクの晩年に、こんなエピソードがある。彼がテルアビブの町を、やはりイスラエルの

地に移り住んでいたラヴィニツキと、イディッシュ語で談笑しながら歩いていた。すると、ひとりの青年が彼らを見て、イディッシュ語をしゃべるな、ヘブライ語で話せ、と文句をつけてきた。ビアリクは激昂して青年をののしり返したのだが、この青年は、公衆の面前で侮辱されたとしてビアリクを告訴してしまう。（ただし、これにはさらにこんなオチがついている。被告側証人として出廷したラヴィニツキに、原告側弁護士が“ビアリクは何とののしったか？”と質問する。ラヴィニツキが「Lekh la-'Azazel!」（敢えて訳せば「地獄に落ちろ！」）に相当するヘブライ語）と答えると、告訴はすぐに取り下げられたという。）ビアリクは、「国民的詩人」であるにもかかわらず、否むしろそれ故にこそ、教条的なヘブライ語至上主義者の標的にされたのである。

ビアリク自身はイディッシュ語を排撃する意思は毛頭なく、ヘブライ大学設立にあたっても、イディッシュ語学科設立の運動に関与している。ただし、この運動も、イディッシュ語学科の講義をイディッシュ語で行うかヘブライ語で行うかの論争に巻き込まれ、結局のところ、ビアリクの存命中にイディッシュ語学科の設立は実現しなかった。

ビアリクのイディッシュ語に対する態度が最も激しい非難にさらされた事件のひとつは、おそらく1927年、イディッシュ語作家のショーレム・アッシュとペレッツ・ヒルシュバインがイスラエルの地を訪問したときのことであろう。ビアリクはヘブライ作家協会の会長として彼らを歓待したのであるが、ヘブライ語詩人のアブラハム・シュロンスキーはこれを攻撃し、ビアリクの「二重言語構想」を「民族の臓腑に巣くう癌」であると非難した。ヘブライ語文学をなんとか成立させようとしていたシュロンスキーにとって、すでに大きな読者を獲得していたイディッシュ語文学の存在が脅威であったことは想像に難くない。しかしビアリクは、彼自身ヘブライ語の復活を希求し、またそのために尽力しつつ、イディッシュ語世界の大きさと可能性を十分に認識し、そして何よりも母語としてのイディッシュ語への愛着を捨て切りはしなかったのである。アッシュとヒルシュバインの歓迎会でビアリクは挨拶に立ち、こんな風に語っている。

ふたつの言語は、天国では一対であって、分かたれているのではありません。共に呼吸し、相寄り添って生き、同じ乳をすっています。ある時わたしは、ヘブライ語とイディッシュ語をルツとナオミになぞらえたこともあるのです。

ビアリクの死は1934年。その後イディッシュ語がたどる運命を彼はおそらく予感してはいなかったであろう。

資料・文献

— <http://benyehuda.org/bialik/>

— Hayyim Nahman Bialik, *Shirim: lider un poemen*, Berlin 1922.

— Steven L. Jacobs, *Shirot Bialik*, Columbus 1987.

— Shmuel Avnery, „Ha-mabu'a ha-nistar. Rawnitzki shebe-Bialik“: *Ha-aretz* (2004.05.06) (<http://www.haaretz.co.il/literature/1.964372>)

- Sara Feinstein, *Sunshine, Blossoms and Blood. H. N. Bialik in His Time*, Lanham 2005.
- Ziva Shamir, „»Ben-adam, qum berach ha-midbara.« 'Al tekhnat ha-piphiyot shel lashon yidish le-phi shiro shel Bialik »In shkhite shtot«”: *Khulyot* 9 (2005) 71-84.

(ウェブ・サイトの最終閲覧はいずれも 2013 年 11 月)